The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東方哲学カフェ見聞録
Author(s)	武田, 朋士
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 12, p. 12-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【哲学カフェ報告】
テーマ：「（傷つける）ケア」
進行役：寺田俊郎
於：明治学院大学白金キャンパス

東方哲学カフェ見聞録

武田朋士

去る６月７日、明治学院大学において寺田氏（明治学院大学助教授）進行のもと「（傷つける）ケア」のテーマで哲学カフェが開催された。以下は、それに参加しての報告および感想である。

哲学カフェとは、いくつかのルール（人の話すことをよく聴く（人の話をさえぎらない、指名されてから話す）、率直に話す（各々の発言・考え・感じ方の違いを大切にする、自分の言葉で話す（人の言葉を長々と引用しない、自分の経験・実感に基づいて話す））のもと、日常に即して普段考えていることを、一人でではなくみんなで、じっくりと、でもコーヒーを片手にリラックスして、考え、議論することを目的としている。

今回は、２０名弱の参加者で、２時間半にわたって議論が行われた。

各自簡単な自己紹介とともに「ケア」のイメージを述べた後、議論への導入として数ページのテキストが配布された。事前に告知されていたテーマは「ケア」であったが、議論を「傷つけるケア」という方向へ持って行きたいという進行役のねらいから、鷲田清一氏の『老いの空白』（弘文堂　２００３）の「置き去りにするケア」と題された箇所（１９６－２０３頁）がテキストとして選ばれた。その中の、ケアする側の人の「死ね」という言葉がケアになることがあるという部分が音読され、そのことについての感想を求める形で議論に入った。「傷つけるケア」としても恐らくもっとも極端な形のものと思われる「死ね」という言葉が提示されたこともあり、その言葉自体に反発を覚えるという意見もあったが、そのようなケアもありうるということが実体験に即した形で語られるなどして、議論はケアの成立を関係性から問うという形でほぼ展開されていくことになった。極端な形からケアが問われることで、そもそものケアの成立そのものが問われたことは、議論としてとても刺激的なものだった。ケアは送り手の意図とは関係ないところで成立するのか、ケアとは偶然の産物ではないか、何が傷つけることをケアにするのか、・・・。

本来ならば、ここからさらに問いを絞り込むことが出来れば、議論としては見通しやすいものになったのかもしれない。しかし、２時間半の限られた時間ではそれはなかなか難しいだろう。そのため、参加者にとっては最終的にケアについてのイメージが一変させられるもしくはケアについての考えが深まるというよりは、引っかきまわされて終わったという印象が強かったかもしれない。しかし、無理をして中途半端にまとまったようなものになってしまってもいけないと思う。哲学カフェ終了後、ある参加者に感想

を聞いてみたところ、「同じテーマについて話していて、同じ言葉を使っているはずなのに、同じと見なされている中の「ずれ」が気になる。何かが「ずれて」先へ進んでしまっていたように思う。」という言葉が返ってきた。時間的に厳しいとしても、議論が展開して問いが深められていくという側面がなければ、哲学カフェという場所の意義は限りなく小さなものになってしまうだろう。しかし哲学カフェでは、展開されている問いが各々の参加者から離れたものになってしまっていないか、という点に特に注意を払わなければならないように思う。哲学カフェの「哲学」は決して専門性を帯びてしまった偏狭な意味のものではない。背景を全く異にする人たちに開かれた「哲学」である以上、そこでは、問いが深められることが求められると共に、常に、そもそも議論が成立しているのかどうかが反省されなければならないだろう。私に感想を語ってくれた人が感じた「ずれ」とは、そもそも議論が成立していたのかどうかという懐疑だと私は受け取った。ただ、各自の「ずれ」は、議論が展開されていく中でこそ露呈されていくものであると思う。各々の「ずれ」とは、互いに自分の意見を言い合い、それを単純に認め合うことで明確になるようなものではない。２～３時間という限られた時間の中で哲学カフェが哲学カフェとして成立するために求められるものは、大きい。

もうひとつ、今回の哲学カフェで気になったのは、テキストの存在である。テーマを考えれば、テキストによる導入という形は、一つの有効な方法であったと思う。ただ、あくまで導入という形でテキストが用いられたのではあったのが、哲学カフェ全体を通してどこかで影を落とし続けていたように思う。議論の中心にテキストがあり続けたというわけではないが、少し間違えばテキスト解釈をもって自分の意見とする危険性があるように感じた。それと同時に、テキストがどこか硬い空気をつくっているのかもしれないとも思った。哲学カフェにおけるテキストの役割ということもまた、考えていく余地のあることだと思う。

最後に個人的な反省。準備などのお手伝いもあって最初寺田氏に挨拶に伺ったそのときに初めて、大阪から手土産の一つも持参しなかったことに気がついた。哲学カフェに参加するために来たというのに、お菓子の一つでも持っていこうという気づかいすら出来なかった私は、ケアに関する議論に少し恥ずかしさを感じながら参加することになった・・・（お菓子をはじめとして哲学カフェの会場のセッティングは、昨年度同じく寺田氏の下行われた哲学カフェに参加した方々が自主的に行ってくださっていたことを付け加えておく）。

（たけだともひと）